

説教要旨「岩の上に土台を」

ルカによる福音書6章43～49節

私たちは、イエス様に向かって「主よ、主よ」と呼びながら、イエス様の言葉に従うことがなかなかできない者です。「敵を愛しなさい」という一つのことをとってのもそうです。敵を愛し、自分を憎む者に親切にし、悪口を言う者に祝福を祈り、侮辱する者のために祈ることができない、むしろ、敵への憎しみや非難の言葉や、あんな人は兄弟姉妹として認めない、受け入れない、という言葉ばかりが私たちの口から出てしまうのです。

イエス様の言葉を聞いて行うとは、自分の力で自分を磨き、敵をも愛することができるような寛容な、愛に満ちた心を養い、それを実行していくことができる立派な人になることではありません。イエス様は、私の心が醜悪で、敵を愛するどころか、ごくごく身近な人であっても愛することが出来ないようなものであることをご存じなのです。それでも主はみ言葉をくださるのです。このみ言葉を本当に聞き、そのみ言葉に基づいて生きること、つまり、自分は、自分の清さや正しさや寛容によってではなく、恩知らずの悪人であるにもかかわらず、ただ神様の憐れみによって神の子とされているのだ、と信じて生きること、それこそが、イエス様の言葉を聞いて行うことなのです。

イエス様は、私たちが、聞いたみ言葉をどう行うか、実行することができるか、そういう私たちの力、私たちの立派さや寛容さ、信仰的实力などの上に人生の土台を置けと言っておられるわけではありません。そもそも私たちの力や立派さや愛や寛容さなど、人生の土台をおけるほどしっかりした岩ではないのです。私たちが、人生の土台を据えるべき本当にしっかりとした岩、それは、神様が私たちを、私のことを愛してくださっているという現実です。この神様の愛こそが土台を置くべき岩なのです。自分の力で人生の土台を築こうと努力することではありません。そういうことをやめて、目に見えるこの世の事柄の背後にある神様の愛に信頼して日常の生活を歩むことなのです。この歩みこそが、み言葉を聞いて行うことなのです。